

14-2 資本主義の発展段階と競争の諸条件（資本のおかれた諸条件と競争の諸条件）

「資本の内的諸法則——それは資本の発展の歴史的な初期段階においてはたんに傾向として現れるにすぎない——は、自由競争が発展するかぎり、またその範囲内で、はじめて法則として措定されるのであり、またそのかぎりでのみ、資本にもとづく生産が自分に適合した諸形態をとる。というのは、自由競争は資本にもとづく生産様式の自由な発展であり、資本の諸条件とこれらの諸条件をたえず再生産する過程としての資本の諸条件との自由な発展であるからである。……資本が弱いあいだは、資本そのものが、過去の、すなわち資本の出現とともに消え去りつつある、生産諸様式のささえをもとめる。自分を強力なものと感じるようになると、資本はこのささえを投げ捨て、自分自身の諸法則に従って運動する。資本が自分自身を発展の制限であると感じ意識しはじめると、資本は次のような諸形態に、すなわち、自由競争の抑制によって、資本の支配を完成するようにみえながら、同時に資本の解体の、また資本にもとづく生産様式の解体の告知者でもある諸形態に、逃げ場をもとめる。……いずれにせよ、競争を自由な個性のいわゆる絶対的な形態とみる幻想が消えさるならば、このことは、競争の諸条件、すなわち資本にもとづく生産の諸条件が、すでに制限として感じられ考えられているということ、したがってまた、すでに制限となっており、またますますそうなるということの証拠である。」

（マルクス経済学レキシコンⅤ P31~33 マルクス『経済学批判要綱』Ⅲ、P599-602）

コメント

資本は自分自身の発展限界を感じると、資本の発展の前提である自由競争を自ら抑制し、擬似的な計画経済によって利益をみんなで分け合うようになる。しかし、このことは、自由競争を前提とし、競争を自由な個性のいわゆる絶対的な形態とみる資本主義の幻想を消し去り、資本主義の存在意義を失わせる。